

「精神革命」と自然の問題

— 廣池千九郎の意義 —

伊東 俊太郎

今日、「伝統の日」ですがお話するようにご依頼を受けて、どういう事をお話しすれば良いかと思っただんですが、私はこのところずっと、その近代科学ができたがる「科学革命」以前に起こったもう一つの大きな人類史の曲がり角、「精神革命」というものを取り上げて考え続けております。

この「精神革命」というのはどういうものかといいますと、みなさんご存知のソクラテスとか、ゴータマ・ブツダ、孔子、イエスなどが出現した人類史の精神上的の大変革なんですね。それが紀元前六世紀から一世紀にかけて東西に平行して起こるわけです。この問題をずっと考え続けておりますので、今日はこのテーマを取らせていただいて、それと廣池千九郎先生の自然観、世界観、倫理観との関連についてお話ししてみようと思えます。

まず第一番目は「精神革命」とは何かという問題から入りますけど、これは今申しましたように前六世紀から紀元ごろにかけて東西の人類が平行して経験した精神上的の変革です。私の人類史の枠組みによると「人類革命」、これが一番初めの人類が成立した革命です。それから「農業革命」。これは人

間が食料の生産ということを始めるんですね。あるものを選んでくる採集・漁撈・狩猟ではなく。農業、牧畜といったような食料を人為的につくり育てて、そして経済的基盤というものを確立していく。これが二番目の「農業革命」ですね。三番目が「都市革命」で、その農業革命が起こった所に、たくさん農作物が蓄積されて余剰が出来る。全員が農業をやる必要がなくなる。そこで農業以外のことに携わる余裕が出来たときにそういう人間は都市を作るんです。都市というものが地球上に初めて出現してくる。別の言葉で言えば、「civilization」、つまり「文明」の成立なんですね。「文明」というこの日本語のもとになっている「civilization」というのは「都市化」の意味ですね。これはエジプトとか、メソポタミア、インダス、中国の黄河の流域に起こったのですね。その次の第四番目の大変革期が今日お話をする「精神革命」です。それは人間文化の外部の話ではない。直立歩行を始めたときに人類は成立しますが、それは骨格の問題。それに伴う言語の発生、道具の製作とか色々あります。また農業革命のような生産構造の変革でもなければ、都市といったいろいろな文明装置の革命でもなくて、正に人間の内部、人間の精神の内部の変革が起きた革命なんですね。だから人類はここから精神史の領域に入ります。それをつくり上げた中心的な人がギリシアではソクラテス、中国では孔子、インドではゴータマ・ブツダ、そして中東ではイエス・キリストであるというわけです。それに続いて十七世紀に「科学革命」というのが起こります。これは近代科学の成立で、これで現在の宇宙時代、核時代、先端技術の時代に真っ直ぐ繋がる変革の原点になるものですね。これは十七世紀のヨーロッパに起こって全世界に拡がります。そこで話が終わらないで、もう一つ我々は現在で第六番目の大きな変化に遭遇していると私は考えています。人類は科学技術をもった今の路線を進めていけばいいのではなくて、それが生み出した負の効果、つまり環境をめぐっての人間と自然との関係。人間と自然との関係をもう一度よく考え直して、そして現代の地球上で起こっている環境問題に対して根本的に新しい態度を作り上げなければ、あと百年人類が生き延びてゆけるかわかりません。そういう

時代に入ってきています。そういう時代において、どういふ根本的な変革が今起こらなければならぬかということを考えなければいけない。それが「環境革命」であって我々は今その真つ只中にいると思うんですね。

これが全体的な展望ですが、次にはこの「精神革命」の問題に入ります。それには四つの文脈があるわけですが、ギリシアではソクラテスにおけるギリシア哲学の成立というのが、人類の知性と思想の歴史において非常に大きな変革がありました。それから中国では孔子がつくり上げた儒教の形成という思想の変革がありました。更にインドでゴータマ・ブッダが現れて仏教を成立させ、これがまた非常に広がって儒教と共に東アジアの精神世界の根底を作ってきたということはご存知だと思います。それからもう一つ、ユダヤ教から発するキリスト教が成立し、これがギリシア哲学と一緒になつてこのヨーロッパの思想の基盤を作ることになります。ここに東西の精神的基盤がつけられる。少し遅れて世界宗教としてもう一つ、イスラム教が現れて、真ん中の中東や中央アジアに広がった。というふうな構造になるんですね。今日は、イスラムは成立の時代が遅れますのでそれを除いて、それ以外の四つの文脈についてその本質は何であるのかということのみをまず申し上げましょう。

この一つ一つが大きなテーマです。例えばソクラテスについて一年間講義することもできるぐらいです。それを今日は大変短い時間でやらなければいけない。ソクラテスのほかに孔子もブッダもイエスもある。だからここではそのエッセンスが何なのかということだけをお伝えするにとどめます。

さてソクラテスのなした事、それは一体何であったんだろうか。どんな変革をソクラテスは人類に与えたんだろうか。それは一言で言ってしまうと、彼が人間の内部の魂を発見したということだと思えます。「魂を発見した」——ギリシア語で「プシューケー」というが、この「魂」を発見した。しかしその前から人間に心はあったのはもちろんです。人間には心はありましたけど、ソクラテスが発見した魂というものは、全く新しいものでした。それまでギリシア人は「プシューケー」をどのよう

に考えていたか。「プシューケー」は元々「息をする」という意味からくるので、ホメロスという詩人は、それは死んでいく時にふーと噴き出す息であってそれがその死んだ人の形をして出て行くんだと言っています。その後ときどきこの世に現れてきて、生きている友達に向かって「俺もこんな風に弱々しい影のような、煙のようなプシューケーになってしまったよ」と、パトロクロスの亡霊がアキレウスにそのように嘆くわけですよ。普通のギリシア人にとっては「プシューケー」とはそんなものだったのですが、ところがソクラテスが言う「プシューケー」とはそのようなものではなくて、人間の善悪を根本的に反省する人格的・倫理的主体としての魂なんです。つまり、人間の何が正しく、生きるかどうかを考える。そういう人間の内的な魂、それをソクラテスは発見した。そしてその魂において見出されるものが「イデア」というものです。「イデア」というのは聞いたようなものでもあるし、或いはちょっとわからない、といわれるものかもしれませんが、これはまあ日本語の「理想」とか「理念」と考えて下さい。それを実現しようとして努める、その目標となる理念、イデアというものがこの「プシューケー」の相関者として見出される。だからプシューケーとイデアは対になっている。こうした意味での「プシューケー」が確立されなければ「イデア」は見えてこない。このように「プシューケー」によって人間の生きていくべき正しい理念、イデアが見出される。だからそこに初めて倫理学が確立されたといつて良いと思うんですね。「魂の配慮」ということを、ソクラテスはアテネの人々に言いました。ソクラテスはアテネ出身の人ですよ。そこには当時いろいろな新しい思想が入ってきていました。特に「ソフィスト」とよばれる知識人が「アレテー」というものを教えると称していたが、この「アレテー」というのは今日では「徳」と訳されうる言葉ですが、実は彼らにおいては、単に「有能」であること、「うまく家を造る」とか「相手をうまく説得して議論に勝つ」といった、そんな「有能さ」ばかりを問題にしていた。それに対してソクラテスはアテネの人々に言う。「アテネはギリシアの中心でギリシアの模範であるのに、みなさんは有力になら

うとか、お金を儲けようとか、名声を得ようとかするだけにとめて、一体あなたがたの魂そのものを配慮しない、それに心を配らないことを恥じないのか」と問いかけたんですね。これは当時全く新しい問いかけだったんですよ。そんなこと、ギリシア人は考えたこともなかった。これが彼の魂、つまり「プシューケー」の発見によるイデアへの道、理想を求める道というのがここで始まります。これが、ソクラテスが行なった最も重要なことで、それがその後プラトン、アリストテレスへと受けつがれていく。

孔子がおこなったこと、それはどんな大きな変革だったんでしょうか。孔子は「礼」の教師として出発した。礼を人に教えるんですね。人間社会にはこういう時はこういう風にしなさいという決まりがあるじゃないですか。それを教えるんですね。この社会儀礼を教える集団を「儒」というのですが、孔子のお母さんがそうだった。お母さんは下等儒という「儒」のひとりで、一般の人々にそうした儀礼を教えていたらしい。この意味では彼はお母さんの職を継いだといってもいいと思いますね。お父さんは堂々たる武人でした。孔子はこういう儒集団、つまりそういう礼を教える集団から出て、阪という田舎町の出身者に「礼」なんかわかるのかと馬鹿にされながらも仕官して、だんだん貴族たちに礼を教えるようになったが、やがて孔子は、この礼は、礼だけにつきない、礼の根底に「仁」というものがなければいけないということを言い出したんですね。この「仁」ということを孔子は初めて言い出した。

「仁」とは何でしょう。論語を読むとこの仁とは何であるかを巡って色々な弟子たちが対話をするんですが、一人一人によって答えが違いますね。その根底が何かというと、彼は結局、仁とは「人を愛す」ことだといっています。「人にして仁にあらずんば、礼はいかんせん」。つまりもしも人間の心にその人の事を思う「仁」がなくて単に形式的な「礼」を踏むだけならば、そんなものはないといっただけですよ。みなさんお葬式に行くとご焼香で三回やらなきゃいけない。あれも一つの

礼ですよね。でも一番大切なのは生前のその人のことを思いだして、その人のことを悼むこと、つまりもう一度その人との愛を回復すること——そのことが重要なんですよね。つまり彼の言いたかったことは、礼、礼と人は言うけれどもその根底には仁がなければ何の意味もない。これが孔子の変革の、革新の中心と言ってよいでしょう。つまり礼を仁に変えた、変えたといっていけないかもしれないが、礼が礼として本来に生きるのは、そこに仁の心が根底になければいけないんだということを言っただけです。これは当時すごいことだったと思います。つまり、みんなこうやんなさいと言われて形式的にこうやる、それだけの礼はなんの意味もない。そこに仁があつて初めて人間と人間との関係、本当の関係が成り立つんだ——それが大切なのだということ喝破したのですね。

ブッダがなしたこと。この人のなした精神的変革は何なんでしょう。ブッダが目にしたことは、この世の苦です。苦しみです。だからソクラテスと違いますね。ソクラテスはアイデアを知ることだったけど、ブッダはまず苦というものに注目する。

彼は王子として生まれるんです。王子として生まれるんですが、小さいときから人間がなぜ生まれ、いろいろな苦しみを持って病んで老いてそして死んでいく、この苦を受けなければならぬのか。ということ問い続けて、人間はどうして苦しまなきゃいけないのか、この苦しみからどのようにしたら抜け出すことができるのだろうか。これを問い続けた。その後彼の長い思索のあとで、結論をいってしまふと、その苦しみは人間の執着から起こるのです。この世界のものほども常住なものがなく、絶えず変わっていく。縁があり、因がありそして結果がでてくる。所謂「縁起」というものです。縁起が悪いとか、今は大分意味は変質しているけど、ゴータマ・ブッダが言っていることは、そういう「縁起」を超えた変らない実体なんて言うものはこの世界にはない、縁起の世界で次々に変わっていく。それにも関わらず「変らないもの」としてそれにしがみつく。それが苦なんです。この縁起の世界を「空」といいますが、これは何も無い、空っぽだということではない。永遠に変らない実

体などというものはない——すべては諸行無常の縁起の世界でそれをしっかり見ようということなのです。

ところが人はともすればなんか絶対であり続けるものがあってそれが欲しいと思う。これを「タンハー」という。「タンハー」というのは「渴愛」で、飢え渴く愛、これにしがみついている。これが苦しみの根元になるのです。縁起による空と言うものを認識した上でその執着から逃れる。ある人はお金というものにしがみつくと、ある人は愛人とか。なんかしがみついて離れられない。距離をとって諸行無常としてみえていくことができない。これが苦しみのもとになるんだ。だからその空の世界を見ることによってそこに「涅槃」というものに到達して、これはサンスクリット語の「ニルヴァーナ」で、これは「煩惱を吹き消した世界」という意味で、つまりそういう執着からはなれて涅槃の境地に入れば、そこから新しい人生が始まるんだということをブッダは言ったんですね。またそこから菩薩行も初めて可能になるんです。菩薩になって人を救うことができる。他人に対する慈悲の行為というものもそこで初めて本当に可能になる。これはもう少しのちのちの大乗仏教になってこのことがもつとはつきりするんですが、ブッダ自身の中心のテーマはこの苦からの脱出でした。

イエス・キリストのなしたこと。イエスは一体何をしたのか。イエスの変革は何なんだろうか。彼はイスラエルのナザレという所の大王の息子として生まれました。当然、ユダヤ教を信じていました。しかし彼は長ずるに及ばず、洗礼者ヨハネという人であって非常に大きな精神的な転換を遂げるんですが、このヨハネは殺されてしまいます。そこでイエスはヨハネの代わりに自分がやらなければいけない、ということになった。三十歳超えたそこその頃。そこでもうヨハネはいない。自分の先行者は死んでしまった。聖書ではヨハネはイエスに靴の紐を結ぶほどのそんな価値もないといっているけども、実はイエスはヨハネの弟子だった。ヨハネに洗礼してもらうわけですよ。そして立ち上って「天国は近づけり、くい改めて福音を信ぜよ」と人びとに呼びかけた。そして律法主義者という

ものに立ち向かっていったんですね。

律法主義者ってなんでしょ。ユダヤ教は律法の宗教で、律法というのは「トーラー」といいますけど神の与えた、こうすべきだっていう決まりですね。みなさん十戒というのはご存知だけど、あれは律法中の律法で、もっと細かい律法がたくさんあるわけですね。ああしなければいけない、こうしなければいけないという当時の風潮に対して、彼は非常に反発する。そこで彼がまず始めたことは病に苦しむ人を治すことです。当時ローマに占領されていましたから、あの辺の人びとはひどい目に合わされていました。精神的な病いの人が多かったでしょうね。ライ病の人も。そういう人に治療を行っただけですね。それが安息日だった。そうすると律法主義者からみると安息日なのにあんなことをやって、律法に反しているということなだけけど、そのときイエスが言った、「安息日は人間の為にあるのであり、安息日の為に人間があるのではない」という言葉は革新的でした。しかし反動もあつたでしょう。早速、イスラエルのユダヤ教の祭司たちに通報されて、睨まれる。また、姦淫をした女の人がいて、この女が姦淫した、律法を破つたとみんなで石を投げていた。そこをイエスを通つた。皆がこの女をどうするとイエスに問うた。彼は少ししやがみ込んで地に何かを書いていたが、やがて立ち上がっていった言葉が、「汝らのうち罪なきものまず石持て打て」だったんですね。これもすごいんですね。痛烈な一言です。人の罪を責めるのは易しい、だけど自分はどうなんだ、これを言っただけですね。つまり、イエスは律法を愛に変えた。もちろん、彼自身が言っているように「私は律法を壊すために来たんじゃない、完成させるために来たんだ」と言っています。しかし、律法を完成させるためには愛が必要なんです。ユダヤ教の偉いお坊さんなんか知らん顔して病人のそばを通って行ってしまふ。その人を異邦人のサマリヤ人が介抱している。それをイエスは称えた。だからその愛はユダヤ教を越えている。人類に向かっているんですね。だから世界宗教であり、こういう変革をイエスは

やっただんですね。

これらの人びとの思想は、廣池博士が「最高道德」といったものですよね。それぞれ偉大な精神的達成だと思えます。しかしここに残っている問題があります。それは「自然」の問題なんです。これらの人々がやり遂げようとしたことは人間の「精神」の救済である。自然はこうした「精神革命」の遂行者たちの直接の考察の対象ではない。それは当時「環境問題」なんてことは存在しなかったんですから当然だったのかも知れません。まずそこで為さるべきことは人間の魂のよりよいあり方を求めて人びとに倫理的な生き方の原理を示すことを目指した。それが一番必要だった時代だったんですね。それは後世にも影響して我々はこの四人の先駆者の影響下にいまでもあります。それぞれ学ぶことが多いです。

だがそこに一つの問題がある。それが「自然」の問題で、これがとり残されている。そういう意味で「精神革命」はやはり人間中心主義であった。ところで廣池博士のモラロジーの根底には絶えず「自然」の問題がある。倫理を説きながら絶えず自然の問題がある。つまり、自然の法則というものが問題になってくる。これは立木教夫先生が『比較文明研究』の第一号に廣池博士が説いた自然と道德がいかに関わっているかという問題をとりあげられているが、これは非常にいい論文だと思えます。この自然の法則の問題が博士の倫理学と深く結びついている。廣池博士にとって道德と自然の問題とは実は一つのものなんです。そして「我々人間は自然の力により、自然に生まれでて、自然の力によって生かされている」「私たち人間はこの宇宙の自然界に発生した現象の一つであって、この自然の法則によって生存し発達する」。したがって「人間は自然の法則に従うことが人間の倫理の根底になるんだ」と繰り返し言われているんですね。これはさきにあげた四人にはなかったことです。ただブツダだけ「草木国土悉皆成仏」ということを考えたと言われるが、これも実は大乘仏教にはいってからです。ところが廣池博士の場合には道德の原理、人間の倫理と自然のあり方というもの

関係を言っておられることに注目すべきだと思っただけです。

ところで「精神革命」の後に起こった十七世紀の「科学革命」、近代科学の成立ですね。ガリレオ、ニュートンとか思いだして下さい。そこでは確かに自然が主たる考究の対象となります。これは自然科学の発展ですから。しかし、その自然とは何かというとデカルトが樹立したような機械論的な自然なんです。これはどういうことかという、簡単に言えば要するに、そこに一本の木がありませんね、それが全部「機械」、生命のない機械だと考える。単なる幾何学的な「延長」だと。だからそれを数学的に操作すればいい。それによって自然は捉えられ、そのことによって人間は「自然の主人で所有者」になれる。こういうわけです。つまりこの自然から生命とか意識とか質的なものは全部取り除いてしまう。だから量だけの世界に還元されるわけです。これは倫理の対象にはならない。しかし、自然というものは、本当は自分で自分をつくり出してゆく「創発自己組織系」なのだと思います。自然は単に他によって操作される機械ではない。つまり宇宙はビッグバンから始まってその中に銀河系ができ、銀河系の中に太陽系ができ、太陽系の中に地球が形成されて、その地球の上に生命が誕生し、それから更にそれが進化発展して我々人間が作り出されてきたんです。これは創発自己組織系です。そういう方向に宇宙論も生命論も変わってきている。そういう宇宙の進化を押し進めてゆく何か力のようなものを神と再定義するならば、それはもう人格的な神ではないですよ。なんか髭の生えたおじいさんが「光あれ」と唱えたなら世界ができたとかそんな話ではない。この世界の存在自身の能動的な力によって我々は今存在している。このように把え直すと、自然は倫理学の対象になる。このことによって我々と自然とが繋がりが、それと一体性も明らかにされ、今日の環境問題も解決していく基本的立場にもなるでしょう。デカルトみたいに自然は機械だ。そして自分はその外にいる、自分は「我思う」の思考によって、自然を設計したり、操作する。そういうような他人事の関係では環境問題を解決できません。我々は明らかに自然の一部なんです。自然は長い進化によって繋

がっている我々の兄弟なんです。こういう立場が確立したときに環境問題に対する態度が変わってくる。科学の見方も違ってくる。人間の生き方も変わってくる。人間の自然に対する態度が変わってくる。そのことよって二十一世紀の新しい自然と人間との関係が樹立されると思います。この自然と人間を一体化して捉える廣池博士のこの自然観、倫理観は大きな意味をもっていると思われる。このような見方から廣池博士のいうモラロジを捉えなおしていくことが非常に大切なのではないかと思うわけです。ご清聴ありがとうございました。

追記

(1) ソクラテス・孔子・ブッダ・イエスについては、道徳科学研究センター編『聖人の思想とその現代的意義』（モラロジ研究所、平成二十年）のなかの拙稿「精神革命」とその現代的課題」に、より詳しい記述がありますので、関心のある方は参照してみてください。

(2) 「創発自己組織系」については、『モラロジ研究』六十二号（平成二十年九月）に、拙稿「創発自己組織系としての自然」が載せられています。詳しくはこの講演論文を、参考にしてください。

（編集注…本稿は、平成二十一年六月七日に開催された、モラロジ研究所主催「伝統の日 まなびの集い（講演会）」の内容を収録したものである。）